



山口浜屋税理士法人  
東京都日野市豊田4-14-14  
TEL042-586-9050

## 第30号



諏訪神社にて 職員（白子）撮影

代表社員 浜屋 浩

## 年頭所感 ～アラムハラドの問い～

皆様すこやかに新春をお迎えのことと存じます 皆様にとって、新年が希望にみちた年となりますよう祈念しております



正月恒例の箱根駅伝では、青山学院大学が圧倒的な強さ

を見せ、大会新記録で優勝しました。原監督がインタビューで、決められたトレーニング方法通りに取り組むだけではなくて、自分で律する、「自律」。自ら考え行動し、課題に向き合って前に進む姿勢ができていくということ勝因として語っていました。

このインタビューを聞いたときに、私は小学校の担任の先生が卒業文集に寄せてくださった言葉を思い出しました。

それは、宮沢賢治の「学者アラムハラドがみた着物」という作品から引用した、「小鳥が啼かないでいられず、魚が泳がないでいられないよう

に、人が何としてもしないではいけないものは何でしょうか？みなさんも考えてみてください。」という問いかけでした。

作中で、学者のアラムハラドは多くの弟子を抱えています。アラムハラドがした先の問いかけに対し、弟子の一人ブランドは「人は、いいことをしないではいけないです。」と答えました。アラムハラドはこれを「そうだ。私がそう言おうと思っていた。すべて人は善いこと、正しいことをこのむ。(中略)人の正義を愛することはちょうど鳥のうたわないでいられないと同じだ」と賞賛します。

さらに、別の弟子セララバアドが何か言いたそうにしている様子に気づいて答えるよう促すと、彼女は「人は本当のいいことが何だかを考えないでいられないと思います。」と答えます。アラムハラドは少し間を置いた後「うん。そうだ。人はまことを求める。真理を求める。ほんとうの道を求めるのだ」と、真理や善について語りました。(この場面は、アラムハラド自身が、セララバアドの答えによって新しい気づきを得たように感じられます。)

このアラムハラドと弟子たちの問答には、大人が子どもと接するときの大切な姿勢が示されているように思います。

思考を刺激する発問は子どもたちの思考を深め、自ら大切なことに気づくきっかけとなること。また、それを行うことで、大人が用意していた以上の答えが生まれる場合があること。教師でもあった宮沢賢治はこのことに気づいており、これこそが教育について一番大切だと考えていたのかもしれない。

わたしの恩師はこの問いかけを通じて、卒業生に「自分の感じた疑問に自分なりの答えを見つけようとするのが大切なのですよ。」と伝えようとされたのではないかと思います。これは、私自身が「何を学ぶことが大切なのか」そして「何をすることが子どもたちの将来のためになるのか」を考えるきっかけともなりました。

また、最近手に取った「たった一つを変えるだけ」(ダン・ロススタイン 吉田新一郎 訳 新評論)はさらに一歩踏み込み、生徒自身が「質問する力」を身につけることの重要性を指摘しています。

著者は今まで当たり前に思われてきた教師からの生徒への発問(決まりきった、ただ一つの答えを問う発問)を、これまで問われることのなかった悪しき伝統(習慣)と断じ、「生徒自身による質問づくり」への転換を提唱しています。そして教師には、生徒たちが

より良い質問を作り出すための「質問の焦点」を示すことを求めています。

「質問の焦点」は、それをきっかけに生徒たちが考え、質問をつくりだすための材料です。効果的な質問の焦点が示された授業の実践は、主体的に学ぶ学習者を育てるために効果的であった、という事例が多く紹介されています。



個人が自分自身の問題意識に基づいて問いを持つことにとどまらず、「社会全体として共通する、解決すべき課題はなにか」という問いがあります。それは自由や平等、正義といった概念や、望ましい社会とはなにか、という大きな視点を求められる難問です。

「アラムハラドの問い」を通じて思考を深め、ひいては自ら問いを作り出す経験を重ねることで、こういったすぐに答えがでないような課題にさえも向き合うための力をはぐくむことが、これからの教育には求められているのではないのでしょうか。(浩)

# つれづれなるままに～わたしの読書ノート～

「ぼく モグラ キツネ 馬」  
（チャーリー・マッケージー  
著 飛鳥新社）

お正月、以前テレビで紹介されているのを見て購入したものの、本棚に入れたままになっていた本を読みました。帯には、「世界中で100万人の心をつかんだ本」、著者からのメッセージには「この本が、あなたを勇気づけられますように」と記されています。

物語は人間の「ぼく」がモグラ、キツネ、馬と順番に出会い、旅をする形で綴られます。作中から、何節か私の心にのこった言葉をご紹介します。

“じぶんにやさしくすることが、いちばんのやさしさなんだ”

“いままでにあなたがいったなかで、いちばんゆうかななことばは？” ぼくがたずねると、馬はこたえた。“たすけで”

“ときには…”と馬がいいかけた。“ときには、なに？”とぼく。“ただ起きあがって前にすすむだけでもゆうかんですばらしい、という日もある”

“この世界をおもしろがろう”

若かりしとき、失敗したり不安に思ったりしたとき、その時々で周りの人からこのような声をかけていただき、今の自分があると思い返しました。そして、この本が話題になった意味を考えてみました。

職場の心許せる上司、同僚。家庭や学校での友人。親戚や近所のおじさんおばさん。日常的にそばにいる彼らは、かつて私にとって「モグラ」「キツネ」「馬」のように気づきと癒やしを与えてくれましたが、こんな日常が失われつつある現代において、この絵本の投げかけてくれる言葉が新鮮に心に刺さるのではないか、と思います。

=====

**財政学の本質 ハイエク主義の政治経済学**（山田太門著 慶應義塾大学出版会）

例年12月は「与党による税制改正大綱」が発表されます。大綱を読んで「租税の本質とは」と思い、恩師からいただいた本を思い出して手に取りました。「第5章 租税制度のあり方」では、租税原則論（公平・中立・簡素）について、次のようにのべています。

「租税原則論は原則そのもの以上に、一方において租税システムの政府からの独立性の

担保と、他方において税収と民間経済のバランスの確保、すなわち税率や税収の規模の限定の必要性を示していることも重要なのである。」

私はこの租税のあり方が望ましいものと感じていて、「税制改正」が租税の本質から外れているのではないかと疑問を抱いたのだということに気づかされました。

経済に中立ではないし、税金でさまざまな困りごとを安易に解決しようとしている。それなのに「所得格差」は広がるばかり。社会経済が不安定な今はそうせざるを得ないのでしょうか。我が国の困難な課題は、小手先の「税制」で解決できるものではないかとおもうのですが。

=====

当法人のシンボルマークには「○・△・□」が配されており、○は心を、△は効率を、□は規律を表現しています。経営にはそのどれもが欠けてはならないものであり、どれが勝ってしまってもうましくないものです。心と効率と法の遵守をバランスよく、本質を見失わず、挑戦していきたいと思えます。

本年もよろしく願いいたします。  
（玲子）